

S. Iwanoto

神学と人文(大阪キリスト教短期大学紀要) 第34集 1994年12月発行 抜刷

ジョン・ウェスリの神学的遺産(Ⅲ)

—「聖化論」をめぐる(1)—

岩 本 助 成

ジョン・ウェスリの神学的遺産(Ⅲ)

—「聖化論」をめぐる(1)—

岩本助成

I ウェスリの聖化論の再評価について

—序説にかえて—

本小論は、ジョン・ウェスリの聖化論、特に、彼の神学思想の核心部分ともいうべき「キリスト者の完全」や「全き愛」という概念について考察したものである。全体は三つの部分から成る。まず、聖化論の内容の把握につとめる。聖化論をめぐる彼の様々な資料を、それらの内容を比較しながら検討していくとき、各資料が生まれてきた思想的背景の変化を知ることができ、また、彼の神学的成熟の過程をたどることもできる。

第二の部分では、ウェスリとギリシア教父ニュッサのグレゴリオスの聖化の神学、特に、その完全論との比較研究を行う。さらに、ルターとカルヴァンの聖化論との比較研究が続く。古代教会教父や両改革者という偉大な先達たちとの間でウェスリが直接、間接に行った神学的対質を検討することによって、ウェスリの聖化の神学そのものが、より鮮やかに浮き彫りにされることを願う。

第三の部分において、以上で把握につとめたウェスリの聖化論をめぐる、今日、提起されているいくつかの課題を取り上げて論じる。たとえば、彼がいわゆる「社会的なきよめ」(social holiness)の問題をどう考えていたか、などを論述したい。

さて、「全き聖化、全き愛、キリスト者の完全」という概念が、「完璧」とか、「完全主義」(perfectionism)と混同して考えられ易いためか、ウェスリの聖化論や完全論はある種の先入観をもって否定的に評価されることが多かった。ある人

物やその思想が、第一次資料に基づく厳密な神学的対質を試みられないままであれば、それはまことに残念なことと言わねばならない。ウェスリの場合、W. ニーゼル(W. Niesel), R. ニーバー(R. Niebuhr), 桑田秀延などの碩学の著作においてさえ、厳密な神学的対質に欠けた論評を受けている点がある。⁽¹⁾

ところが、近年、従来の傾向に一つの変化が起こっている。ウェスリの聖化の神学を真正面から取り上げて論じる傾向、または、彼を第一次資料で読んで議論する傾向が起りつつある。ウェスリ研究者でなく、また、メソジストの伝統に属さない何人かの神学者の論述をここで取り上げてみたい。

J. モルトマン(J. Moltmann)は、『いのちの御霊——総体的聖霊論・組織神学論叢 4』の序言において、彼がギリシア正教会の神学との神学的対話に至った経緯のほかに、なぜ、ウェスリを取り上げるようになったかについて触れている。1990年夏学期のゼミナール「生の再生と聖化」における学生たちとの共同研究の結果、また、彼のもとで学んだ博士候補生の一人にウェスリ研究者がいたために、彼自身、ウェスリやメソジストについて多くを学ぶ機会を得たと述べる。⁽²⁾

彼は同書第8章に、「ルターとウェスリの義認と聖化」という節を設け、両者の比較研究を行い、読者に対してウェスリの「生の聖化」の再認識を促す。「成立しつつある18世紀の産業社会の世界、機械のもとでの労働規律と無産階級についての表象世界」にあって、ウェスリは、罪を「治療されねばならない病い」と受け取り、

再生の概念によって義認を受け止めたと解釈する。また、ウェスリが罪人の義認という観点よりも、「宗教的・道徳的罪人の更新の過程により多くの関心をもつ」事実を指摘する。信仰者の主体性と生活態度の規律の発見という観点にも注目する。これは、「解放された主体性を喪失し、「いわゆる文明病と神経症的障害が増大する」現代社会にあって、一層、重要性を増しつつある論点ではないかというのが、モルトマンの評価である。彼は、さらに、ルター派とメソジスト派との聖化論の相違を学ぶために、「ウェスリとツィンツェンドルフとの神学的対話」を長く引用して、読者の参考に供する。⁽³⁾

オランダの改革派神学者H. ベルコフ (H. Berkhof) の『キリスト教信仰論』を取り上げる。⁽⁴⁾ 彼は、人間における神の更新の御業を考えると、その中心はあくまでも「神の更新の業そのもの」にあるとして、人間における「完全をゴールとする考え方」は避けねばならないと論じる。しかし、この問題点とかかわる「重要な例外は、メソディズム、特に、その創始者ジョン・ウェスリである。」と述べている。なぜなら、ウェスリは聖書が強調する点に正しく従っているからだと言う。ウェスリはキリスト者の完全を高調するが、彼が言う完全とは、すべての罪を除くキリストの愛に統体的に生きることにはかならない。聖書の救いの概念に関して、「更新」という論点を設定するベルコフではあるが、「神学的に言って、ウェスリのこの立場は、普通、受け取られている以上に、真剣に検討する価値がある。」と言い切る。⁽⁵⁾

J. ペリカン (J. Pelikan) の『教理史』第5巻を開いてみよう。⁽⁶⁾ ペリカンは「こころの神学」(The Theology of the Heart) という章を設け、その章でウェスリの神学などを論じている。特に、「福音主義的完全論」の考察には17頁を割り、また、12頁を用いて「聖霊体験」の項を論じる。歴史神学者ペリカンは、ウェスリ学者アウトラー (A. C. Outler) も記述する perfected perfection と perfecting perfection という区別に注目して、ウェスリの立場を後者に正しく

位置づけている。⁽⁷⁾

最後に、佐藤敏夫『キリスト教神学概論』を挙げたい。佐藤は、特に聖化論の項目でウェスリを取り上げ、その完全論や罪観を的確に分析した後、リントシュトレーム (H. Lindström) による「完全の三つの面」、すなわち、意思の純粹、キリストの模倣、神と隣人に対する全き愛の三つを取り上げて正しい評価を下す。⁽⁸⁾

以上に例証したようなウェスリ神学への本格的な注目は、今後、ますますエキューメンカルな神学研究において深まるであろう。今日、メソジストの伝統内における研究は目覚ましいものがあるが、同時に、他の神学的伝統から「世界教会に託された重要な神学的共通財産の一部としてのウェスリとその神学」が再評価されることを願う。そのために重要なことのの一つとして、ウェスリ神学と他の異なった神学的伝統との間に、より生産的な神学的対話が繰り広げられ、相補的な研究の成果の実がますます豊かになるように望んでいる。

II ウェスリの聖化の神学

1 義認と聖化から「全き聖化」へ

説教「聖書における救いの道」(The Scripture Way of Salvation) において、ウェスリは義認と聖化との関係を論じる。⁽⁹⁾ 彼はキリスト教を救いの宗教と語り、救いと信仰は全聖書の本質を含む真髄であるとする。救いは、恵みの最初のきざしから栄光のうちに完成されるまでの、「神の惜しめない恵みによって、あなたがたが今、所有している祝福」と述べる。救いを「状態」(state) でなく、「過程」(process) や「成長」(progress) において捉えた。それは「先行の恵み」から始まる。先行の恵みは、「父なる神が引き寄せてくださる恵みの働きのすべて」であり、神を求めるもろもろの欲求、罪の自覚を含む。しかし、抑圧、忘却、否定など、恵みへの妨げが起こってくることも否めない。次は、義認と聖化である。義認とは、キリストの血と義の代償による罪の赦し、免罪である。聖化の恵みは、義認と同時に始まる。義認という「関

係的な (relative) 変化」と共に、聖化という「現実的、実体的な (real) 変化」が与えられ、キリスト者は内面的に更新されていく。全人類への愛が与えられてキリスト・イエスの心が内に形成されるのが聖化の恵みである。

義とされてきよめの恵みに生き始めた人々は、自分の罪が根絶され罪との関係が無くなってしまったと考え易い。しかし、罪は一時的に停止したのであって滅ぼされてしまったのではない。誘惑は戻り、罪は生き返る。「罪から全く自由にされた」と思ったとき、内に隠れていた罪が起き出すという事例が多い。原罪の現実直面することも事実であるが、同時に、義認・新生とともに与えられる「聖化の漸進的働き」も恵みの事実である。

さて、ウェスリは、恵みの過程を「聖化の漸進的恵み」という概念で止めなかった。そうしていたなら、論争も混乱や紛争も少なかったであろう。彼は聖化の恵みを歩む者に、全き聖化、神と隣人への全き愛、キリスト者の完全が与えられると確言した。「キリスト者の完全」とは何か。「全き愛」とは何か。神が主イエス・キリストにあって、聖霊によってわれわれの魂の全容積を愛で満たしてくださること、「常に喜び、絶えず祈り、すべてのことを感謝する」愛の生活のみに溢れさせてくださることにほかならなかった。

2 「救いの段階的秩序」(ordo salutis) をめぐって

ウェスリの聖化論の内容を検討する前に、いわゆる「救いの段階的秩序 (オルドー・サルゥティス)」について触れておきたい。ウェスリは、大枠では国教会の伝統を継承した。先行の恵み、義認と新生、続いて聖化を「救いの段階的秩序」とした。さらに彼独自の「全き聖化、全き愛」と付した後、栄化という最終的救いを教えて、いわゆる「オルドー・サルゥティス」とした。果たして、聖書には救いについての厳密な段階付けがあるのか。佐藤敏夫は「聖書においては、新生、義認、聖化、和解等の諸概念は決

して体系化されて論じられているわけではない。」と指摘する。ある程度の体系化は認められても、体系化の限界を知る必要があると言う。¹⁰⁰ 義認、聖化、全き愛などは、神の恵みの事実であって、決して教理体系や抽象的な概念そのものではない。本来の本質を歪めて厳密に体系化し過ぎ、段階的に位置付けることに腐心してはならない。ウェスリは聖化とかキリスト者の完全という教理を体系化したり、図式的に考えたりする人物ではなかった。むしろ、聖書の約束、教会の伝統、神の賜物としての理性や経験的事実に立ち、「教会と個々のキリスト者に与えられる神の恵み」を証しするため、聖書的真理を表わすものとしてこれらの神学用語を用いたに過ぎなかった。もし、ウェスリの神学やメソジストの教理が必要以上に体系化されているとすれば、識者がそれぞれに指摘するように、それは第19世紀アメリカのメソディズムの所産であって、第18世紀のウェスリが与かり知らぬところであった。従って、今日のわれわれとしては、これらの教理用語でウェスリが表現しようとした本来的な恵みの事実は何であったのかを常に問い直しつつ考察を進める必要がある。

松浦純は、厳密なルター解釈を施しながら、「ルターの『場』(forum)の思考、言葉を中心とする思考を概念化しようとする試み」をメランヒトンに見て、「われわれの外」と「われわれの中」を、「関係」と「質」という枠組で表すようになった経過を考察する。その経過で「義認と聖化」は、プロテスタント神学の基本構図の典型となったと説く。松浦はカルヴァンに続いてウェスリにも言及し、彼が言う聖化における「現実的な変化 (a real change)」の「現実 (real)」という語の意味を問うている。¹⁰¹ 改革者の信仰と神学に基盤をおくわれわれは、松浦の論述にきわめて多くを学ぶ。しかし、ルターとウェスリとの間にある理解の相違をも痛感する。この点については、ルターの聖化論との比較研究の部分で言及したい。

ウェスリの神学に多くを負う現代アメリカのキリスト教倫理学者ハワーワス (Stanley

Hauerwas)も、義認や聖化という概念の問題点を挙げ、「事実、これらの用語の問題は、抽象である点にある。それらをイエスの生と死から分離するなら、キリスト者の生活は混乱してしまう。『聖化』は、イエスの物語を自分の物語にするために、わたしたちの歩むべき旅路を思い出す方法である。」と述べる。⁹² ハワーワスも、ウェスリの最大の関心事は、義認や聖化という抽象的な教理用語そのものにあったと考えていない。主イエス・キリストの十字架と復活の福音そのものが、聖霊の働きにより信仰にあって、現実の生活のただ中で、どのようにしてキリスト者自身のものとされていくかが関心事であった。「性格」(character)と聖化との関係や「神の国の倫理」を考察する中で、ハワーワスは彼なりの聖化観の探求を続ける。⁹³ ウェスリの神学的苦悶を批判的に継承するわれわれも、ハワーワスの一つのよい模範として、現代におけるより適切な概念を模索しつつ、この課題に答えていかねばならない。

3 聖化論形成の背景をめぐって

筆者がウェスリの義認論や新生論を考察した論文において既に触れた点ではあるが、⁹⁴ ウェスリは、宗教的な家庭環境、若い日の『イミタティオ・クリスティ』など霊的古典の読書と実践を通じて、特に、テイラー(Jeremy Taylor)やロー(William Law)など、国教会の「聖化の神学」、または「至福の神学」の熱烈な信奉者となった。生涯かけて、きよさ(holiness)を追求し、献身の生活を実践する道にいそしんだ。それはやがて彼を、聖書の熱心な学びへと導く。しかし、ジョージア伝道の失敗や霊的苦悶と遍歴の末、モラヴィア兄弟団のペーター・ベラー(Peter Böhler)らが説く「信仰義認の福音的基盤に立つ恵み」を得ることとなった。ここで、特筆すべきことは、ウェスリが「批判的継承の三重の道」をたどることとなった事実である。一つの道とは、モラヴィア派によって手ほどきを受けた信仰義認の福音主義的真理は、彼をして母国イングランドの「国教会改革者たちの信

仰義認の独特な伝統」へと回帰させた道である。彼は国教会改革者の『説教集』、『祈禱書』、『信仰箇条』の順守とともに、その伝統を批判的に継承することによって母国と国教会との霊的更新への召命に応えていく。

第二の道とは、上述の「聖化の神学」を、信仰義認の福音主義的原理に立った上で再検討し、批判的に継承するという道であった。換言すれば、ウェスリは若い日に培われた聖化の神学を生涯、決して捨て去りはしなかったということである。⁹⁵ 信仰義認の基盤に立ちつつ聖化をその神学的核心として再創造していくことは、彼自身、若い日からの神の召命に応える道を歩むことにほかならなかった。

第三の道とは、以上述べた二つの道を、第18世紀の時代的激変の中で、胎動する新しい社会的状況に対応しながら、特に、中層以下の民衆を相手にした幅広い臨床の神学と牧会活動の立場から、社会のただ中で悩みつつ生き抜いている一般大衆の言葉で語り伝えようとした道であった。神がわれわれのために(for us)成し遂げてくださった事柄が、いかにしてわれわれの中に(in us)継続され完成されるかを示そうと試みた。彼が約50年間にわたり、徒歩や馬で旅行し続けた40万キロの道のり、4~5万回といわれる屋内や野外での説教、チャールズと共に作ったといわれる数千曲の讃美歌によって「歌う会衆」を形成していった事実を、上述の道にあって決して忘れてはならない。

その生涯かけての力説にもかかわらず、ウェスリの聖化の神学は、絶え間ない攻撃や論争にさらされた。彼は繰り返して、それが聖書的真理であること、自ら1725年(Jeremy Taylorに触れた年)以来、説き続けている「キリスト教の主流の伝統」であること、単純、鮮明、平易、自明な教理であることを語った。ウェスリがそう説明したとしても、同時代の人々は、率直にその言葉を受け取るわけにはいかなかった。比較的安定した社会状況を呈してきた第18世紀イングランド社会と、農村部を中心に依然として確固たる教区制度を保持していた国教会体制

にとって、「宗教的熱狂の嫌疑をかけられる運動」は許されるものではなかった。ところが、ラップも指摘するように、当時の国教会において「完全」をテーマとするなら、直ちに、カタリ派、霊的フランシスコ派、アナバプティスト派、ピューリタン分派など「熱狂主義」の嫌疑をかけられたのが事実である。¹⁶⁶ しかも、ウェスリにとって全く心外なことであったが、人々から「熱狂派」のラベルをはられることは、「道徳律廃棄論者 (antinomianism)」のラベルをはられて糾弾されることでもあった。複雑な状況を背後にもつ、ウェスリと熱狂派との対立と抗争については、第三の部分におい論述する。ここでは準備的に、「聖化の定義と用語」を問うた後、彼の「キリスト者の完全論」の内容の分析に入っていく。

4 聖化の定義と用語

I. リヴァース (Isabel Rivers) の指摘を待つまでもなく、ジョン・ウェスリの信仰と神学と活動の源泉は、彼の聖化論にあった。リヴァースは、この核心部分についての定義をウェスリ自身から聞き取るために、以下のような諸事項を挙げている。¹⁶⁷

① ウェスリは、1745年10月、『メソジストと呼ばれる人々への助言』(Advice to the People called Methodists)なる一文を書いた。「こころと生活の両面で、……普遍的なきよさ (holiness)、神の平和と喜びに満ちた愛、見えない事柄についての超自然的な証し、われわれが神の子であるという内的な証し、聖霊の啓発、などの絶対的必要性を熱心に継続的に説き続けている」者たちが、メソジストと呼ばれる人々以外に在るであろうかと、彼は問う。¹⁶⁸

② 1744年から89年に至るメソジストの群れの『年会議事録』の一部に、以下のような問答が記録されている。「問3.メソジストと呼ばれる伝道者たちを、神が何のために、その御意思によって起こしたもうたと正しく信じ得るか。答。新しい教派を起こすためではない。国家を、特に国教会を改革するため、そして聖書的きよさを全

地に告げ広めるために起こされたのである。」¹⁶⁹

③ 1790年、その死の前年に、ウェスリは「全き聖化」という教理は、「神がメソジストと呼ばれる人々に預けられた偉大なる信託 (the grand depositum) である。」と書き残す。¹⁷⁰

ウェスリは、きよさ (holiness) の同義語として、「愛(キリスト者の愛、全き愛を含む)」、「キリスト者の自由」、「聖化、全き聖化、(full or entire sanctification)」、「純粹」、「簡潔」などを用いた。最も重要視された用語は「完全 (perfection)」という語であった。次のようなウェスリの引用文を読めば、彼がいかにこれらの同義語を自由に用いているかが分かる。「キリスト者の完全とは、きよさ、(ホーリネス)の別名にほかならない。同じ事柄に付けられた二つの名称である。」¹⁷¹「このことを、わたしは聖化(瞬間的な業と漸進的な業)という語で表す。また、完全、愛において全くされること、愛で満たされることと表している。」¹⁷²「全き愛とキリスト者の自由とは、全く同じ事柄である。……キリスト者の自由は、ホーリネスの別名でなくて他の何であろうか。」¹⁷³「キリスト者のホーリネスの本質は、簡潔であり純粹であり、……全き献身であることを覚えておくように。」¹⁷⁴その他に、「内的きよさ、内的気質、きよい気質」、「社会的なホーリネス (social holiness)」、「こころと生活のきよさ」、「意図の純粹」、「神の似像」という言葉を用いる。

5 聖化論の資料

ウェスリの聖化論の主たる資料としては、次のようなものが挙げられる。

- ① 説教「キリスト者の完全 (Christian Perfection)」1741年頃以降
- ② 説教「忍耐について (On Patience)」1784年
- ③ 説教「完全について (On Perfection)」1785年
- ④ 『日記』特に第13部～16部のうち1764～71年頃のもの
- ⑤ 『手紙』特に1760～70年代のもの
- ⑥ G. ラップ (E. Gordon Rupp) が、「このテーマに関する初期のすべての論述を包含した

少し長くて散漫な文書」⁹²と評した『キリスト者の完全に関する平明な解説』(A Plain Account of Christian Perfection) (以下、「解説」と略記)は、群れの指導書でもあった。

- ⑦ 『新約聖書略注』(Explanatory Notes upon the N. T.) 福音書のほか、パウロ(特に第1コリント13章など)、ヤコブ、ペテロ、ヨハネ書簡(特に第1ヨハネ)における彼の聖書釈義など。

6 「キリスト者の完全」の意味と内容

『讚美歌集 第二版』(1752年)には、以下のような「キリスト者の完全」の定義がある。「①キリスト者の完全とは、神と隣人に対する愛のことで、すべての罪から解放されることを意味している。②これは信仰によってのみ受けられる。③それは瞬間的に、一瞬のうちに与えられる。④われわれはそれを、死の間際にはなく、あらゆる瞬間に待ち望むことができる。今は恵みの時、今は救いの日である。」また、1764年の年会において再検討され総括された11の命題が『解説』に記されている。⁹³ 概括化のそしりを免れないかも知れぬが、この命題(アンダーラインを付す)を掲げた後、筆者が解説を加えながら考察していく。

- ① 完全といわれるものがある。なぜなら、聖書で繰り返し述べられているからである。

ここで「完全といわれるもの」(such a thing as perfection)とは、完全という用語や概念だけでなく、その語が示す広汎な聖書の使信を指すと思われる。ウェスリは、説教「キリスト者の完全」においてこう述べる。「聖書の中で、これ以上に不快を与えてきた表現はないと言える。完全を説教する者、……すなわち、完全がこの地上の生活で得られると主張する者は誰でも、異教徒や取税人よりも悪い人間であると、世間の人々にみなされる大きな危険を冒す。……ある人々は、これらの表現を全く捨てるように勧めてくれた。……しかし、これらの表現は神の言葉である聖書中に存在していないだろうか。もし存在しているなら、たとい、すべての人が

つまづくとしても、どういう権威によって神の使者たる者がこれらの表現を捨て得るか。……神が語られたことを悉くわれわれは語ろう。……われわれは、これらの表現を捨ててはならない。と言うのは、それらは神の言葉であって、人間の言葉ではないからである。」⁹⁴ ウェスリのこの確信は、終生変わることがなかった。完全、聖化、全き愛などという言葉で表されている事柄は、聖書の福音の核心にほかならないというのが、彼の信じ貫いたところだったからである。われわれはここで、果たしてそれらが聖書の福音の核心をなしているかどうかという根本的課題を繰り返し問うこととなる。

- ② それは義認のときより早くはない。なぜなら、義とされた人びとが「完成を目指して進む」(ヘブル6:1)からである。

この命題は、説教「聖書における救いの道」が明らかにするように、義認信仰を根拠として、はじめて聖化の信仰が成り立つという彼の確信を述べた項目である。義認と新生を基点として聖化の生活が始まり、続いて全き聖化への希望が与えられる。同時に、この主張は三つの立場に対する彼の「否」を意味した。第一に、国教会の神学者たち、ひいては、ローマ・カトリック教会が教示する「聖化の神学」に対して、その義認信仰の欠落ゆえにウェスリは同調できなかった。第二に、「義化の神学」に対しても、聖化を強調するウェスリは賛意を表明できない。第三に、聖化において絶対的な完全が与えられるので、「全き愛における成長も、完成を目指して進むこともあり得ない」とする「熱狂派の完全論神学」に対しても、彼は大きな「否」を表さざるを得なかった。

- ③ それは死のときほど遅くはない。なぜなら聖パウロは、生きている人について完全であるということを語っているからである。

上記の説教の終わりの部分において、ウェスリはこう語る。「われわれが聖化される信仰、罪から救われて愛において完全にされる信仰とは何か。それは第一に、神が聖書においてそれを約束されたという、神からの明示と確信である。

……第二に、約束されたことを神は成しとげることができるといふ、神からの明示と確信である。……第三に、神は今もそれをなし得るし、なそうとしておられるといふ、神からの明示と確信である。」(下線は筆者)²⁹

論述は続く。人は不可能と断言するが神は完成される。漸進的にか、瞬間的にか。人々の経験上の諸実例は前者を示す。しかし、神の救いの御業は昔も今も、瞬時に変えたもう御業を証しするがゆえに、後者が願わしい。従って、毎瞬間、求める必要がある。もし、その希望が破られたとしても、失ったものは何もない。われわれの希望は破られていない。毎日、毎瞬間、求めよ。瞬間に求めてなせいけなうか。しかし、信仰によって求めているか、業として求めているか。後者ならば、「……あらねばならない」とか、「……しなければならぬ」という世界に陥ってしまう。だが、信仰によるなら「ありのままの今のあなたとして待ち望んでよい」。ありのままのあなたとして、今、期待せよ。「信仰によって」ということ、「ありのままのあなたとして」ということ、「今」ということ、これら三つの要素は切り離せない。この三つで求めることである。主イエスが戸口に立っておられる。主を迎え入れて永遠の愛の祝宴にはべりたい。……

ウェスリは、神が主イエス・キリストにあって、聖霊を通して与えられる恵みを、過去の救いの歴史として見ながら、さらに「現在から未来に向けての恵み」と強調する。現在の未来的な神の恵みを、人は決して不信仰や人間的な知恵や経験によって阻止したり制限したりしてはならないと言う。キリスト者の側の何かからではなく、「神の恵みの事実」に立って発言する。生前に与えられる全き愛の恵み。この点についての改革者の消極的、または否定的発言に対してウェスリがどのように応えようとしたかは、比較研究を試みる第二の部分において論述したい。

④ それは絶対的なものではない。絶対的な完全は人にも天使にも属さず、ただ神のみに

属する。

⑤ それは人間を無謬にするものではない。人は肉体にあるあいだ、無謬ではない。

ウェスリがキリスト者の完全、または全き愛の概念に与えた「限定」である。説教「キリスト者の完全」において既にこの点に触れている。彼は完全に関する「否定的な定義」から入る。聖書や経験から明らかな通り、キリスト者は知識において完全ではない。無知からも解放されていない。三位一体の神の秘義など、われわれが知り得ぬ奥義は無数にある。誤謬からも解放されていない。無知は多くの誤謬をうむ。弱点からも解放されていない。誘惑からの自由もない。全き愛に満たされた状態からの脱落からも自由でない。キリスト者の「完全」とは「常に恵みのもとで成長する完全」である。

ウェスリはさらに信仰と悔い改めについて説く。信仰が義認の唯一の条件 (condition) である。信仰者以外、誰も義とされぬ。しかし、悔い改めも、その実も必要でないのか。悔い改めは、信仰と同じ意味で、同じ程度、必要なのではない。信仰は義認のために直接的に必要であり、悔い改めは、間接的に信仰のために必要である。信仰だけが、義認のために必要な唯一の条件である。続いて、「行為によって聖化されると教えているのではないか。」という非難に対しては、「正反対のことを教えてきた。」と反駁する。信仰によって聖化される。信仰が聖化の唯一の条件であり、それで十分である。信じる時、すべての人が聖化される。しかし、悔い改めの業も必要ではないのか。義認の前後では、悔い改めの意味は甚だしく異なっている。義認の後の悔い改めは、「われわれの心の中になお残っている罪」、「新生した者にも残っている肉の思い」についての、聖霊による悔い改めのことである。罪は主権を握っていない。絶対的な支配をしてはいない。悪へのわれわれの傾斜、古い自我へと戻り勝ちな心、肉が霊に逆らって欲求する傾向を持っている事実への悔悟が、義認後の悔い改めである。あらゆる口実のもとで、生ける神から離れようとする不信仰からの悔い改

めである。

彼は彼自身の「言行の最善においてさえ、悪が混入する事実を認める。」神の正義という視点からは、人間は到底、耐えられない。自分の無力さ、ただ一つの良い望みさえ形づくることのできないという自覚が残るのみである。しかし、同時に、そのような自覚が与えられているということは、神の自由で全能な恵みが、常にわれわれに先行しているゆえであり、あらゆる瞬間に、神が臨在して下さるからにはほかならない。全き愛に満たされるとき、それは自らの愛の足りなさとの限界とをますます示されて、さらに強く「われらの罪をゆるしたまえ」という祈りへ導かれることでもある。

では、聖化にとっての良い業とは何か。あらゆる敬虔の行為、祈り、聖餐、聖書の学び、断食、集会、禁欲などの「恵みの手段」、すなわち、神の憐れみの行為である。「信徒の中に罪はない。義とされた瞬間に罪は根絶されてしまった。」という意見は、極めて有害なものである。それでは、信徒には悔い改めの必要がないことになってしまう。愛における完全はさらに成長を伴うのに、その余地がなくなってしまう。同時に、人は信仰によって聖化されるのであって、悔い改めによってではない。信仰がなければ聖化もない。実があろうがなかろうが、悔い改めの多少にかかわらず、信じる時、キリストにある者は聖化される。

1762年11月1日の『日記』を開くと、当時、ウェスリを悩ませていたMaxfield-Bell事件に触れている。ウェスリは彼ら熱狂派の誤りを批判する。彼はまず、群れの牧者らしく彼らの長所を評価する。つまり、完全や全き愛を語る点は良いとしている。しかし、問題はその内容である。彼らが絶対的完全を教えること、聖化とともに誤謬、誘惑、墮落から自由にされると想像する点を論難する。また、彼らが義認を攻撃する点、信じるだけで十分であるとして「恵みの手段」を否定する点、霊的傲慢に陥っている点、理性や知識を軽んじて熱心、感情、幻想などを過度に重視する点、さらに分派根性を

持っている点を厳しく叱正する。⁹⁹ また、1785年の説教「完全について」では、人が身体として存在する限り、その身体的本性がもつ限界は当然の事実であり、無知、過誤、弱さ、誘惑の危険は避け難いと繰り返す。¹⁰⁰

⑥ それは無罪のことか。用語について議論することは無益である。それは「罪からの救い」である。

この命題が暗示する「罪なき完全」(sinless perfection)という問題が、彼の言う「無益な議論」を呼んだ。ウェスリは『解説』の中で、説教「キリスト者の完全」が出版された由来について語る。¹⁰¹ 1740年末、彼はロンドンの主教ギブソン博士(Edmund Gibson)と会った。主教はウェスリに「完全という言葉で、あなたは何を言おうとしているのか。」を問う。彼の率直な答えを聞いた主教は、「それがあなたの考えている一切であるなら、それを全世界に向かって公表しなさい。反論は勝手にさせておけば良い。」と勧めた。彼は「主教さま、そう致します。」と答えて実行に移し、ピリピ3:12をテキストとして記したのがこの説教であった。しかし、ラップも評するように、¹⁰² この説教の内容が「その一切」ではなかった。ウェスリの完全論をめぐる論争は、自派か反対派かを問わず、彼の発言の端々を取り上げて極端に誇張した上で、自分たちの解釈に有利なように利用した。彼の説くキリスト者の完全を、「罪なき完全」と誤解する人々が多く起こった。自派の熱狂グループの暴走がそのような嫌疑をさらに招いた。まさに、長兄サミュエルが愛を込めて彼を批判し、弟チャールズも案じ続けた事態が進んだのである。

ウェスリは、説教「忍耐について」においてこう述べている。「あなたがたは、そこで全き者となる。使徒は、このトレイオイ(τέλειοι)ヤコブ1:4という表現によって、次のようなことを意味していると思われる。すなわち、あなたがたがすべての悪い業から、すべての悪い言葉から、すべての罪に汚れた思いから、そうだ、すべての悪い欲望、情欲、気質から、すべての生来の腐敗から、すべての肉적인心の残り滓か

ら、罪のからだそのものから全く救い出されて、心の霊において、すべての正しい気質において、あなたがたを創造された御方の像に従い、義と真のきよさ（ホーリネス）とによって、新たにされるということである。」⁹⁹

つまり、全き愛に満たされた人は、「キリストにある新しい愛の律法」を満たす。その性向、思考、言葉、意図などのすべてが、その源泉をキリストにもっている限り、彼はこの律法を満たしている。しかし、それは上記の「制限」をもった充足である。人間の限界ゆえには満たせないが、愛においては充足できる。ウェスリは、第1ヨハネ3：6の聖句を字義通りに解釈し単純な形で提示した。彼は初期の説教では、義とされ新生した者はあたかも罪を犯さないと解釈できるような表現を示している。しかし、時代を経ると、以下のように罪の意味を限定した上で、罪からの救いを力説するように変化していく。つまり、彼は罪を「実際に、自発的に律法に背くこと、神が示され書かれた律法から逸脱すること」と定義して、消極的に犯してしまった行為を罪と数えない立場を取った。つまり、人間の意志と意図とに関わる「動機の完全」を強調しようとする。ただ、I. H. マーシャル (I. Howard Marshall) も指摘するように、¹⁰⁰ この解釈に対しては現代の聖書学者たちの疑義が出されている。聖書本文をめぐる釈義的な吟味がさらに必要である。マーシャル自身、罪の問題において、その人が意図的に律法に背反したか、無意識的に背反してしまったかを区別づけることの困難を挙げる。

ウェスリは1761年6月7日付けの手紙に書いている。「これらすべての事柄は、ことばの争い (a strife of words) に過ぎない。事柄は明白である。お互いが身体である限り、皆、実践的にも思索的にも過失を犯さざるを得ない。それらを罪と呼ぶか呼ばないか。わたしは再三再四、答えてきた。お好きなようにお呼びなさい。」¹⁰¹ 1741年の説教「キリスト者の完全」の骨子を分析する限りでは、この点に関するウェスリの神学的考察には不十分さが残っている。しかし、

徐々に成熟度を示し、「無罪の完全」を疑わせるような発言を避けて、聖書が証しする「罪からの救い」を熟考するようになる。論争における混乱の拡大は避け難いが、ウェスリが伝えようとした「成熟者とされるキリスト者」(エペソ4：13)について、1763年11月18日の「日記」に次のような記述がある。「原罪と神からの全的墮落について深く確信させられた後で、多くの人々は、信仰と愛とに満たされ（一般的には瞬間的に）、罪が減び去ってしまい、空しい誇りや怒りや欲望や不信仰が、その時から見出せなくなった。……このことを罪の絶滅 (destruction) と呼ぼうが、一時的な停止 (suspension) と呼ぼうが、それは神の栄光の御業に違いないのである。」¹⁰² 彼の心を満たしていたものは、第一に、主イエスの救いが現実的な救いであること、生活の現実面を満たして「キリストの日」を望ませ得る罪への勝利としての聖書の福音であること、その福音が人間の不信仰や知恵によって揺るがされ、危うくされてはならないこと、であった。第二に、「平和の神御自身が、全く聖なる者としてくださる」(第1テサロニケ5：23) 希望に満ちる彼の終末論的神学にとって、死の時まではきよくされないという「恵みについての消極的な理解」は、彼に現在の救いを消極的にしてしまうのではないかという危惧を与えた。それは聖書が証しする、現在から未来へと向かわせる、力ある恵みを十分に反映しないのではあるまいかという懸念を与えた。「聖化、きよさ、完全」などという概念で表現する聖書の福音は、まさに主イエス・キリストのご人格と御業と関わっている。十字架、復活、聖霊の恵みを聖書が伝える広さと深さそのものにおいて、制限することなく伝えたいという願いが彼を満たしていた。

⑦ それは「全き愛」(第1ヨハネ4：18)である。これが完全の本質である。その性質もしくはそれと切り離し得ぬ実は、いつも喜び、絶えず祈り、すべてのことについて感謝することである。(第1テサロニケ5：16など)

「キリスト者の完全」に関する肯定的定義である。全き聖化は、人の救いの目標（ゴール）であり、最終的義認、つまり栄化のための条件である。1739年9月13日の『日記』を読んでみよう。「聖化とは、内的な事柄、すなわち、人の魂の内における神のいのちの事柄、神の御本性に与らせていただくこと、キリストの心を心とすること、われわれを創造された神の似像に従ってわれわれの心を更新されることである。」⁸⁷ また、彼は語る。「愛によって働く信仰は、キリスト者の完全の『広さ、長さ、高さ、深さ』のことである。」⁸⁸ 1769年6月27日付けの手紙は、彼の運動に批判的な人物に宛てられたものであった。「わたしの意味するキリスト者の完全とは、次のようなことである。(1) 心を尽くして神を愛すること。あなたはこれに反対か。(2) 心と生活のすべてを神に献げること。あなたは献げたくないか。(3) 神の全き像を獲得すること。あなたに異論があるか。(4) キリストの心を心とすること。これは行き過ぎであろうか。(5) キリストが歩まれたように歩むこと。キリスト者たる者がこれに反対することはあるまい。完全論にこれ以上の意味をつけ加えたり、これ以外の意味を加えたりする者がいても、わたしとは何の関係もない。」⁸⁹

説教「キリスト者の完全」で、ウェスリは嬰兒から成人に至る成長段階に譬えて、キリスト者の生活にも成長段階があることを（第1ヨハネ2章における「子たちよ、……父たちよ」という呼びかけの例など）示す。キリスト者の完全という限りは、キリストの嬰兒ではなく、キリストの「父たち」と関わった問題である。ここで、「段階、過程、度合い」という言葉をどう理解すべきかが問題となる。ローマ12：3にも、「信仰の力量、度合い」という問題がある。第1コリント第3章でも、肉の人と霊の人との相違や、霊の人への成長が問題となっており、「大切なのは、成長させてくださる神」（7節）と述べられている。われわれは極端に図式的に、段階とか過程を考える解釈には疑問をもつ。信仰の歩みは、神が主イエス・キリストにより、聖霊

にあって与えてくださる恵みであり、「神のいのちの営み」であって、決して図式によって論理的に決め得る類いのものではない。また、霊的な事柄は、身体的成長と全く同次元で考えられない点もある。この点に留意しつつ、恵みの段階とか義とされた者の聖化における成長を、「全き愛」という概念にしばって考えたい。

ウェスリは、キリスト者の完全を「全き愛」（第1ヨハネ4：18）で捉えた。愛とは、関係概念であり、生命概念である。「まず、神がキリスト・イエスにあって示された愛」が、われわれの「神、他者、また、自己への愛」となって、生きた水のように溢れ流れる「いのちの関わり」こそ愛である。マタイ5：48が示すように、「天の父の完全」とは、憎んで迫害する敵を「その愛の領域に収める『全き』愛」である。それが今や、主イエス・キリストにより、聖霊を通してキリストを信じるわれわれの所有とされた。この倫理と生活は福音の結実である。キリストの新しい律法による福音的生活であって、人間の生来の義や業ではない。神の全き愛が、神と人への全き応答愛へとキリスト者を恵みの事実にあって導く。神と隣人への全き愛は、無自覚的で機械的なロボットを導くものではない。キリストにあって更新された神の像としての一人一人に、自覚的で全人的な応答を創造する愛であり、その愛に恵みによって与かる。

『解説』から引用する。「あなたがたは『愛こそ天の天である』という一事を十分に知っておくがよい。宗教においてはこれ以上のものはなく、事実これ以外のものもない。あなたがたが愛を増すこと以外のことを求めているなら、的外れな求め方をしている。王道を逸れた求め方である。……だから、神があなたがたをあらゆる罪から救いたもうた瞬間から、第一コリント13章に叙述されているような愛を増し加える以外に何もものをも目標にしないと決心しなさい。」⁹⁰

⑧ それは改善できるものである。それは極点に達したとか、増大不可能の状態に達したなどということはありえないのであって、愛において完全とされた人は以前にもまし

てすみやかに恵みに成長することができるのである。

- ⑨ それは誤りを犯すことがあり得る。失われることもあり得る。われわれはその例を無数にもっている。しかし、5、6年前までは、われわれはこのことを十分に確認していなかった。

ここで二つの事柄に触れ得る。一つは、もし「全き愛」が、完璧とか絶対的な完全を意味するとすれば、そのような愛に、改善、増大、成長があり得る筈はないという点である。この愛は恵みの賜物であって、人間の可能性や能力の世界におけるものではない。全き愛は常に成長する。従って、まさに perfecting という進行形における完全である。神と隣人とに向かう愛であって、完全という仮の名によるキリスト者の「自己静止的な状態、自己耽溺、愛における人間的完成点や終着点」を否定する。常に他へと向かって止まらない生命的な愛、価値創造的な愛である。

第二に、ウェスリは、キリスト者の完全を追い求める人々の多くの事例に接してきた。彼はチャールズに1766年7月9日付けで手紙を送っている。「信じているこの完全を、わたしははっきりと宣べ伝えることができる。なぜなら500人もの証人を知っているからだ。」⁴⁰しかし、彼は困難な問題に直面する。彼らの証言は、いわば相対的なものであった。証言が正しいものかどうかについて、当人の人柄やその恵みの事実に関する複数の証言が必要となる。しかも、このように相互に探查すること自体、生命的な愛の交わりとしての「全き愛の本質」から大きく逸脱する危険をはらむこととなる。ウェスリは確かに事実とか経験とかいうものの重要性を説いた人物であるが、同時に、それらが持っている不確実性をも痛感していた。そのような反省が上掲の文章に如実に表されていると考える。

- ⑩ それはいつも漸進的な業に先立たれ、後続されるものである。
 ⑪ しかし、それ自体は瞬間的なものであろうか。……

ウェスリは「多くの経験は神の漸進的な恵みの御業を認める」としながら、なぜ「瞬間的な恵みの御業」の方を高調したのか。聖化における時間的要素の問題については、R. L. ステイプルス (R. L. Staples) の論著に詳しく考察されている。⁴¹彼はウェスリの完全論形成史を追う。「死に至るまで漸進的に続く理想としての完全」というローたち神秘主義者からの影響を彼がどのように脱却していくかを考察している。ウェスリが「瞬間的な恵み」を強調したことは、彼が決して人間的な感情の高まりの瞬間性を期待したからではなかった。信仰復興運動における群衆の異常な感情的興奮は、彼が厳に戒めた事柄でさえあった。彼はまた、教育学や心理学でいう覚醒や飛躍を期待したからでもなかった。「上から、聖霊によって、新しく与えられる、神の恵みの御業」を求めたゆえであった。聖書が証しする恵みの事実は、多くの場合、神の瞬間的にもたらされる御業だからである。まさに、瞬間的に行いたもう神の御業への待望であった。同時に、それは決して人間的な「漸進的経験の事実」を無視していない。しかも、人間が神に抗して立てこもり勝ちな「人間的経験という砦」を粉砕する力をもちたもう神の一方的で瞬間的な御業を信じた上でのことであった。両者の関係を「神の恵みの事実」という一点において深く理解しなければならない。

7 一つの要約

英国のメソディズム学者 J. M. ターナー (John Munsey Turner) は、ウェスリの神学を「エプワースのトライアングル」(Epworth Triangle)と呼んで、三項目にまとめる。①神の普遍的な愛の優先性 (the priority of God's universal love), ②個人的な信仰の必要性 (the need for a personal faith), ③神の無限な恵み (no limitations can be put to God's grace), の「三角形」である。特に第三点を特記した後で、筆者の考えを加えたい。

ターナーは、アウトラー (A. C. Outler) の完全論の要約を挙げる。「完全とは、今、この時、

その人が神と人に対する愛に満たされていることの自覚的な確かさ (the conscious certainty) である。この愛は、信仰、希望、愛という神の賜物に初めと終わりをもつ愛である。ある『状態』のことでなく、『ダイナミックな過程(プロセス)』のことである。この過程において、救いの信仰がその初めであり、聖化が通常のクライマックスである。信仰は愛のため、愛は善のため、善は祝福のためである。」それは受け取るべき賜物であるから、人間が死力を尽くすという類いのものではない。恵みの手段も神の憐れみゆえのものである。改革者の「信仰における完全」は、ウェスリにとっては「愛と服従における完全」であった。全き愛は、「倦まず、たゆまず、熱情的に、心を砕きつつ、力を尽くす、他者への生命的かわり」のことである。

ウェスリは社会的きよめという神学概念と行動ゆえに、内向的な敬虔主義を免れたと言われる。彼は国教会の『祈禱書』にある「きよめの集禱」に啓発され、全くこの祈りにおいて生きようと願った。「われわれがあなたを全く愛し、きよい御名を正しく崇めるために、聖霊の恵みによってわれわれの思いをきよめてください。」(下線は筆者)ウェスリの完全論は彼の聖霊論の一部であるが、その神学の全体像から取り上げられるべきものである。完全論だけを取り出して狭い視野から論じてはならない。全体的に見れば、改革者の「信仰の終末論」との関わりで「愛の終末論」を説いたと言えるし、*sola fide*, *sola gratia* を離れずに、改革者の生き生きとした信仰とカトリック的靈性の豊かさとを結んだとも言える。罪の世に身体として存在する者に内在する限界を認めながらも、神の無限の愛が現在から未来を支配するという確信を失わなかった。*holiness*, *health*, *wholeness* を関連づけ、教會的ホーリネスと個人的ホーリネスをも関連づけた。キリスト者と言えども、靈的凡庸さで足れりとする互いの靈的現状である。ウェスリが教えたことは、信じるすべての人々のために (for all) 与えられる聖霊の働きを、信仰生活の奨励、誘因、動機とせよという点であっ

た。彼の神学的態度は、グループ・ダイナミックス研究への洞察や、現代における全人的いやしのための創造的対話への道を開く。全教会に対して「あなたがたは全人的で健全な人々を育成しているか、成長を止めたいじけた人々を育成しているか。」を問わねばならない。ウェスリは全体教会にホーリネスへの関心を回復させた。信仰者の生活に道徳的向上心を再興した。それはプロテスタントとローマ・カトリックとの雑種の混合ではない。「公同教會的な伝道」(catholic evangelism) の創造であった。以上がターナーの論旨の一部である。⁴³

筆者は、ウェスリの「全き愛」における「驚くほどのオプティミズム」(an amazing optimism)⁴⁴ について付言したい。彼には、ピリピ 2:12-13 をテキストとした「自分自身の救いの達成について」(On Working out Our Own Salvation) という画期的な説教がある。⁴⁵ 神が信仰者といかに出会いたまい、信仰者が神を信じて恵みといかに関わるかという問題をめぐって神学的特色を示す説教である。説教の後半において、彼は主イエスの謙虚を基盤としつつ、「内に働いて御意思のままに望ませ、行なわせる」神を信じ、恐れ戦きをもって、自らの救いの達成に努め励まねばならないと奨励する。①われわれのうちに働かれるのは、神御自身であること、②恐れおののいて救いの達成につとめ励むこと、③「うちに働きたもう神御自身と救いの達成に励むわれわれとのつながり」について説き進める。確かに「神が働きたもう」ことがすべてである。しかし、この恵みのすべては、「神が働きたもうゆえにこそ、あなたがたも働くことができる。」(God works, therefore, you can work.) という恵みの賜物と、「神が働きたもうゆえにこそ、あなたがたも働かねばならない。」(God works, therefore you must work.) という恵みの応答的課題とをもたらす。

人は、上記の「働くことができる」ことと、「働かねばならない」ことを重荷と受け取るかも知れない。しかし、これは恵みゆえの可能性であり、恵みゆえの課題である。努力は復活の主

のいのちと、聖霊の執り成しに支えられている。「安価な恵み」の上でうたた寝をしているなら、決して喜びも輝きも存在しない。恵みそのものの本質さえ見失われてしまっている。主イエス・キリストの福音と律法がもたらす真の明るさと強かさによって、罪と弱さの反抗や抵抗、怠慢や傲慢に陥ることなく、いかにして「働くことができ」、「働かねばならない」を実現できるか……ここにウェスリ神学の課題があった。また、恵みを「和解の福音のための共働者とわれわれを召して用い、完成に至らしめる恵み」と捉え、また、「われわれなしに、われわれを創造された神は、われわれなしには、われわれをお救いにならない。」というアウグスティヌスの言葉から、神がわれわれを恵みへの全人的自覚的応答に導かれる感謝を味わった。

従って、恵みの原則は二つに絞られよう。一つは、聖書が証しし改革者が「キリストのみ」、「恵みのみ」、「信仰のみ」など福音主義的原則で明確にした基本線を正しく継承していること、つまり、人間的な業や功績によって得られる義に陥っていないことである。完全が、人間を源泉とする可能性や形而上学的な完全という理念の問題であり、努力や苦闘による達成の問題と解されるなら、それは福音の律法主義的歪曲であり、ペラギウス主義的墮落にほかならない。にもかかわらず、もう一つの原則がある。ウェスリにとって、恵みとは、第18世紀の民衆の現実生活の諸方面に拮がりをもつものであった。実際に彼らを造り変え、恵みの完成へと導いていった現実的な力であった。恵みは、人間や世界の全方面に接点をもつ本来的拮がりにおいて捉えられていた。神の恵みは、思想、科学、芸術などの諸分野、また、人間形成、性格、習慣、身体性、成熟、倫理、道徳など、個人的、社会的なさまざまな領域において働いている。ここでラップが表現する「恵みのオプティミズム」(an optimism of grace) — これは第18世紀の英国においてカルヴィニズムが色濃く宿していた「恵みの悲観主義」(a pessimism of grace) や「啓蒙期における人間中心的で自然主義的楽

天主義」(the optimism of Nature of the Rationalist enlightenment) と対比された造語 — がウェスリ神学をより適切に表現するものとして興味深い。⁴⁶ また、近藤勝彦は現代に要求されているキリスト者像に触れて、それは単純なオプティミストの像ではなく、「主の十字架を通して、十字架につけられた方のよみがえりのいのちにあずかる、そういう意味において、『感謝と希望のオプティミスト』、『したたかなオプティミスト』にキリスト者はならされる。」と述べる時、脈絡が通じてはいないだろうか。⁴⁷ ウェスリには福音が宿している本来的なしたたかさ、明るさを宿す神学の味わいが込められている。キリスト者生活の諸断面に、「キリストがうちに形成される」(ガラテヤ4:19) 証しが与えられていることである。以上の二点のどちらかに偏って理解される時、聖書の福音は十分に解明されない。仮に前者を「信仰の問題」と呼び、後者を「愛の問題」と呼ぶとすれば、ウェスリは両者を「愛によって働く信仰」(ガラテヤ5:6) という愛用の聖句によって総合した人物である。義認信仰が全き愛の聖化を溢れ流れさせるからである。全き愛という奔流を辿ることで福音の源流に至るからである。

D. M. ベイリー (D. M. Baillie) はキリスト論研究における古典的名著 God was in Christ において、第1コリント15:10を中心にその考察を展開した。⁴⁸ 使徒パウロは恵みが「無駄(κενός)になる」事実に触れる。誰よりも多く働いた使徒の働きの一切は、恵みゆえであった。従って、人間的な誇りは起り得ない。しかも、パウロは恵みを無駄にしないために、他の誰よりも多く、彼なりの苦闘を続けた。彼はそれを恵みによるものと感謝する。恵みをただ概念的に考えると、この点は不明なままである。しかし、われわれは現実生活の諸経験から、このような事実が余りにも多いことを知っている。ウェスリが言う「神の恵みゆえに働くことができ、同時に、働かねばならない」という恵みと信仰の応答との生命的な緊張関係が、まさにここでも表現されている。神の恵みが信じる者と

の間で展開する現実的でダイナミックな関わり
の妙である。先行し、臨在し、完成する神の恵
みにあって、恵みを無駄にすることなく、「信仰
の働き、望みの忍耐、愛の労苦」のために、「信
仰によって、今、あるがままの自分として」励
み働くこと、そして、その働きのすべては神の
恵みのゆえであると、感謝の讃詠を献げること、
そのほかに道はない。ウェスリが「キリスト者
の完全、全き愛」で伝えようとしたものは、
チャールズの讚美歌の一節に尽きている。^④

「われらをあらたに つくりきよめて
さかえにさかえを いや増しくわえ
みくににのぼりて みまえに伏す日
みかおのひかりを 映させたまえ。」

注

- (1) ヴィルヘルム・ニーゼル『福音と諸信条 — 信条学教本』、渡辺信夫訳、東京、改革社、1978年、374～383頁、Reinhold Niebuhr, The Nature & Destiny of Man: A Christian Interpretation, Vol.2, N.Y., Charles Scribner's Sons, 1943, pp.174-5, 『桑田秀延全集』第3巻、東京、キリスト新聞社、101～126頁。
- (2) J. モルトマン『いのちの御霊 — 総体的聖霊論 —』(J. モルトマン組織神学論叢 4) 蓮見和男・沖野政弘訳、東京、新教出版社、1994年、1～6頁。
- (3) 同書、245～256頁。
- (4) H. Berkhof, Christian Faith: An Introduction to the Study of the Faith, ET., by S. Woudstra, Grand Rapids, MI., Eerdmans, pp.426～427.
- (5) Ibid., p.427.
- (6) J. Pelikan, Christian Doctrine & Modern Culture (since 1770), (The Christian Tradition: A History of the Development of Doctrine), Vol.5 Chicago, The Univ. of Chicago Press, pp.118-173.
- (7) The Works of John Wesley (BE.), Vol.2, ed. by A. C. Outler, Nashville Tenn., Abingdon, 1985, p.98.
- (8) 佐藤敏夫『キリスト教神学概論』、東京、新教出版社、1994年、242頁。
- (9) The Works of John Wesley (BE.), op. cit., pp. 155-169.
- (10) 佐藤敏夫、前掲書、224頁。
- (11) 松浦純『十字架と薔薇 — 知られざるルター』、東京、岩波書店、1994年、224-227頁、ほかに、「初期ルターにおける義認と聖化」、『日本の神学』23、東京、日本基督教学会編、1984年、56-80頁に優れた論述がある。
- (12) S. ハワーワス、『平和を可能にする神の国』、東方敬信訳、東京、新教出版社、1992年、165頁。
- (13) S. Hauerwas, Character & the Christian Life: A Study in Theological Ethics, San Antonio, Texas, Trinity Univ. Press, 1985. 特に、第5章“Sanctification & the Ethics of Character”は教示に富む。
- (14) 拙稿「ジョン・ウェスリの神学的遺産」(Ⅰ)-(Ⅱ)、『神学と人文』、大阪キリスト教短期大学紀要 第28集、第30集、第32-33集に所収、を参照されたい。
- (15) ハワーワスは、“Characterizing Perfection: Second Thoughts on Character & Sanctification”, T. Runyon (ed.) Wesleyan Theology Today: A Bicentennial Theological Consultation, Nashville, The United Methodist Publishing House, Kingswood Books, 1985, pp.251-263なる論文で、ウェスリがローの完全論から異なった吸収をなし得たのではないかを示唆し、ローの著作を性格論の立場から分析している。
- (16) E. Gordon Rupp, Religion in England 1688-1791, (Oxford History of the Christian Church), Oxford, Clarendon Press, 1986, p.424.
- (17) I. Rivers, Reason, Grace, & Sentiment: A study of the language of religion & ethics in England, 1660-1780, Vol.1. Whichcote to Wesley, Cambridge, Cambridge Univ. Press, 1991, p.243ff.
- (18) The Works of John Wesley (Jackson ed.), Vol.8, Baker Book House, Grand Rapids, M I., 1978, p. 353.
- (19) Ibid., p.299.
- (20) The Letters of the Rev. John Wesley, A. M., J. Telford (ed.), Vol.8, London, Eoworth, 1931, p.238.
- (21) The Works of John Wesley (BE.), op. cit., p.104.
- (22) The Letters of the Rev. John Wesley, A. M., J. Telford (ed.), op. cit. Vol.5., p.215.
- (23) Ibid., p.203.
- (24) Ibid., p.238.
- (25) E. Gordon Rupp, op. cit., p.424.
- (26) The Works of John Wesley (Jackson ed.), Vol.11, p.393, pp.441-2, ほかに、The Letters of the Rev. John Wesley, A. M., J. Telford (ed.), Vol.3, p.213を参照。
- (27) The Works of John Wesley (BE.), op. cit., pp. 99-100.

- (28) Ibid., pp.167-8.
- (29) The Works of John Wesley (BE.), Vol.21, pp. 394-7.
- (30) The Works of John Wesley (BE.), Vol.2, pp.103-4.
- (31) The Works of John Wesley (Jackson ed.), op. cit., p.374.
- (32) E. Gordon Rupp, op. cit., p.425.
- (33) The Works of John Wesley (BE.), Vol.3, p.179.
- (34) ハワード・マーシャル『ヨハネの手紙』, 中村保夫訳, 聖恵授産所出版部, 1993年, 284頁。
- (35) The Letters of the Rev. John Wesley, A. M., J. Telford (ed.), Vol.4, p.155.
- (36) The Works of John Wesley (BE.), Vol.21, p.439.
- (37) The Works of John Wesley (BE.), Vol.19, p.97.
- (38) The Works of John Wesley (Jackson ed.), Vol.14, p.321.
- (39) The Works of John Wesley (BE.), Vol.22, pp. 191-2.
- (40) The Works of John Wesley (Jackson ed.), Vol.11, p.430.
- (41) The Letters of the Rev. John Wesley, A. M., J. Telford (ed.), Vol.5, p.20.
- (42) Robert L. Staples, John Wesley's Doctrine of Christian Perfection: A Reinterpretation, (Pacific School of Religion, D. Th. dissertation), Ann Arbor, Univ. Microfilms International, 1963.
- (43) J. M. Turner, Conflict & Reconciliation, London, Epworth, 1985, pp.44-57.
- (44) Gordon Wakefield, "John & Charles Wesley", G. Rowell (ed.), The English Religious Tradition & the Genius of Anglicanism, Oxford, IKON, 1992, p. 192.
- (45) The Works of John Wesley (BE.), Vol.3, pp. 199-209.
- (46) E. Gordon Rupp, Methodism in Relation to Protestant Tradition, London, Epworth, 1954, p.20; cf. E. G. Rupp, Principalities & Powers, London, Epworth, 1952, p.86.
- (47) 近藤勝彦『信徒のための神学入門』, 東京, 教文館, 1994年, 26頁。
- (48) D. M. Baillie, God was in Christ, N. Y., Charles Scribner's Sons, p.114ff., ほか, D. Fergusson (ed.), Christ, Church, & Society: Essays on John Baillie & Donald Baillie, Edinburgh, T & T Clark, 1993, p.103ff. を参照。
- (49) ジョン・ウェスリとの比較において, チャールズの聖化論を考察する必要もある。J. R. Tyson, Charles Wesley on Sanctification, Grand Rapids, MI., F. Asbury Press, 1986などが参考となろう。